
間違われた救世主

激闘魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違われた救世主

【ZPDF】

Z2365F

【作者名】

激闘魂

【あらすじ】

救世主として異世界に呼ばれた普通の中学生、竜灯藤馬。だが、召喚は手違いだったみたいで……。

暗闇の中、燭台に点けられた炎のぼんやりとした明るさに照らされている一人の女性。

そこは洞穴に近い。回りには魔法陣のような模様が所狭しと書かれてある。

女性の内の1人。背が高い女がおもむろに口を開いた。

「準備は整いましたか？」

もう一人、小さい少女が答える。

「ええ、何とか。」

すると、二人の目の前。とても大きい鏡に、この状況とは全く違うもの。なぜか外の様子が映し出されている。

「ところで、あの二人のどちらが我々を助ける救世主なのですか？」

「あちらの方です。」

と、女は映像が映し出されている鏡を指差した。

「急いでください。我々にとつてはあまりにも時間が惜しい。」

「わかつています。」

そう答えると、少女は何やらぶつぶつと呟いた。

この洞窟に少女の声が響き、燭台の炎が揺れる。あたりに幻想的な雰囲気が漂い始めた。

序章（後書き）

初めまして『激闘魂』です。
中三ですので、文章などに間違いがあると思いますが、これからよろしくお願いします。

第一話・俺つて死んだ！？

第1話・俺つて死んだ！？

いつもの日常。いつもの平穏。わかっちゃいるけどつまらない！少年はそう思いながらいつものように下校していた。

俺の隣を歩いている奴は翔也《しょうや》。おれの親友だ。

「あ～あ。なんか面白い事でも起こらんかなあ

そんな調子の俺に、翔也は苦い顔をした。

「どうした？ テストの点が悪くなつたからつて現実逃避はいかんぞ。」

「ぎくつ

す、鋭すぎる……。

「とか思つてんじやないのか。」

「なんだこいつは、エスパーか！？」

「エスパーでもないぞ。」

そう言つて翔也は嘆息した。

「つたく。お前とどれだけ一緒にいると思つてんだ。」

そう。翔也とは幼稚園のころから知り合つてからの仲なのだ。

翔也は、成績優秀・スポーツ万能、それにイケメンである。この前のバレンタインだつて学校の女性全員（先生も含む）が翔也にチヨ「」を渡すなど、数々の伝説を残している。俺と同じ15歳とは思えん。

それに比べると翔也と対照的な俺、竜灯 藤馬《りゅうひ とうま》。もちろん彼女いない歴15年である。唯一違うのは運動神経が良いだけだ。

一時期、翔也の才能と美貌を恨んだこともあった。

向こうがおれの考えてることが分かるなら俺にもわかるだろ？

「とか思つただろう。」

……手ごわい。

「だつてお前の顔に書いてあるし。」

と、いつもどおりの会話をする。

それから適当に翔也と世間話をし、いつもの道で分かれた。が、俺は翔也の後をついていった。

特に理由はない。ただ単に、翔也にぼろくわ言われたのが悔しくて驚かそうとしたのだ。

ただ、追いかけなかつたらどれだけ良かつただろう。そして、追いかけよかつたと矛盾した考えになるのは少し先の話。

人通りも多いこの道で、翔也の後をつける。あまりに怪しいと翔也はすぐ感知するので、あくまで自然に尾行を続けた。

人ごみで、将也を見失わないようになしながら歩いていくと小さい子供の泣き声が聞こえた

始めは空耳かと思つていたが、耳を澄ませるとはつきりと聞こえてくる。

翔也がそちらを見たので、つられて俺も見る。よく見ると、道路の真ん中に膝を抱えた幼稚園児ぐらいの子供が泣いていた。転んで怪我でもしたのだろう、親とはぐれちゃったのかな？ と、呑気に思考している場合ではないことに気づく。

トラックが蛇行しながら猛スピードで突っ込んでいたのだ。

居眠り運転手に轢かれそうな幼稚園児。なんというアニメ的な展開に動きたくても動けない俺。

翔也を見ると、道路に飛び出して子供の元に向かっていた。

「なつ！」

子供を助けるつもりなんだろうが、あのままでは翔也も危険である。そう思つた俺は、知らないうちに翔也の元へ走つていた。

翔也が子供に追いつきそのまま抱えて走るが、あのままではトラックに撥ねられる。

俺は無我夢中になつて翔也の元に追いつき地面を思い切り蹴つてタックルをした。

間一髪の出来事だった。

後ろを向き、驚いた様子で俺を見る将也。俺は、翔也がトラックに撥ねられない距離まで飛んだことを確認し、今の状況を冷静に考えられる自分に驚いた。自分はトラックからの衝撃に耐えられないだろう。

そう考へると背中から冷たいものが噴き出てきて、死の恐怖から目を瞑つた。

第一話・俺って死んだ！？（後書き）

間違い・「指摘があればお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2365f/>

間違われた救世主

2010年10月28日03時27分発行